

令和7年度 第2回

「川越市幼児教育振興審議会」が開かれました

1 日時 令和8年1月15日（木） 10：00～12：00

2 場所 川越市立教育センター 201研修室

3 <出席委員>

山本 正隆、イテル武田 抄子、岸 梨絵、寺橋 京子、吉田 由子、谷田 円、
小松 悅子、大河原 早菜江、大西麗衣子、山崎真之、山村穂高

<事務局職員> 川越市教育委員会学校教育部教育指導課 こども未来部保育課

4 会議次第

(1) 開 会

(2) あいさつ

(3) 議 事

- ①第48回幼保小連絡懇談会について
- ②令和8年度以降の幼保小連絡懇談会の主題について
- ③令和8年度以降の幼保小実践事例集について
- ④令和8年度以降の幼保小連携について

(4) 閉 会

5 審議内容及び意見の概要

(1) 第48回幼保小連絡懇談会について

- ・全員異議なく原案どおり承認

(2) 令和8年度以降の幼保小連絡懇談会の主題について

- ・(事務局) 令和8年度以降の研究主題については、「ときも学びのプロセス」、文部科学省委託「幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業」で作成した「川越市架け橋期カリキュラム」「スタートカリキュラム」「アプローチカリキュラム」を活用し、引き続き、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛けたりとした子どもたちの資質・能力の育成を研究主題とし、取り組んでいきたいと考えている。令和8、9年度は「健康な生活」から視点を「基本的な生活習慣」に、令和10、11年度は、「他者との関わり」から視点を「言語能力の育成」に、令和12、13年度は「興味・関心」から視点を「探究的な活動/学び」に焦点を絞り設定する予定である。
- ・ここまで提案について、意見・質問はあるか。
- ・前提としては「川越市ときも学びのプロセス」を踏まえて、2年で研究を深めるというものである。
- ・まとめたものを深めるという視点から考えても、2年間でやるというのはとてもいいと思う。
- ・テーマは2年ごとに設定する形でよろしいか
- ・異議なし。
- ・テーマについてはいいと思う。実務的な面で、2年でやるとなると、各園・各学校で担当者が入れ替わることも想定される。園長・校長がどれだけ幼協審に真摯に取り組めるかにかかっている。

- ・幼保小連絡協議会には責任ある立場の方が出席することになっている。それを園・学校に持ち帰り考えていただく。
- ・架け橋期プログラムを実践するために、できれば小学校の1学期の子供たちの様子が知りたい。だが、実践事例集を見ると、切間近の様子が掲載されていることが多い。
- ・実践事例集を作成する目的をきちんと伝える必要がある。
- ・テーマに取り組む期間を2年にすることで、昨年の実践事例集を生かして、他の園を参考にしてやることによって、研究が深まっていく。他の園の実践事例を参考にして、選択肢が増えていく。そのためには4月5月に実勢事例集の作成について、投げかける必要がある。
- ・2年という取り組みはとてもよいと思う。また、振り返りが必要である。「この園の取り組み、この小学校の取り組みいいな」ということを残しておきつつ、次の担当に引き継ぐ形を作っていく。テーマはかつて取り組んだものと同じになるので、データを引き継ぐ必要もある。
- ・幼保小の連携について、1年の流れも明白にするとよい。「子どものよりよい成長を考える研修会」「スタートカリキュラム」等がそれぞれ繋がっていることを分かっていない学校も多いのではないか。教育委員会の通知も工夫していただければと思う。
- ・振り返りシートや、以前同じテーマに取り組んだデータの活用は可能か。
- ・(事務局) 前向きに検討した。
- ・各年のテーマについて、保育園はいつもやっていることである。2年しばりは短いとも感じる。なぜ5~6年というスパンではないのか。P D C Aサイクルを回していく上で2年は短いのではないか。
- ・幼保小連絡懇談会の時間が短く、3つのテーマを1度にやることが難しい。大きなテーマからさらに絞って視点を持って話し合うというのが今回の提案ではないか。
- ・ピンポイントに視点を絞ることで、話し合いが深まるのではないか。
- ・話し合いについて、かっちりしすぎてもよくない。子供についての現場の先生の本音・悩みを聞けるのも大切だと考えている。
- ・話し合いについては、幼児の見方についてなのか、テーマを深めるのか、求めるものによって方向性が異なってくる。
- ・フォーマットに子どもに乗せるのではなく、「これってどういう意味でやっているのか」ということを振り返る場として、テーマが絞られている形がよい。それぞれの園でテーマにそっていろいろな引き出しを出せることが大切である。
- ・学びのプロセスをどう読むかが問われている。3つのテーマはそれぞれ小学校へのベースにあるというのが基本である。3つのテーマの中で、とくにここに視点をしづらって話をしましょう、6年間で2年ごとに3つのテーマについて深めましょうということだと理解している。(学びのプロセスのテーマは)3つはあるけれど、今回は3つの内これについて話をするよ、という提示の工夫が必要であると感じる。
- ・普段やっていること、テーマにそって情報交換をすることが大切である。
- ・テーマを絞るのは1時間しかないからなのか、そして話し合いは研究を現場に落とし込んでいくことが目的なのか。運営側のやり方としてもったいないかなと感じる。
- ・形として反映させるのはとても大変である。しかし、幼稚教育振興審議会を続けていたことでスタートカリキュラムにつながった。つなげていくこと、長い目で見ていくことが大切である。
- ・子供たちが幼稚園・保育園でどう活動していて、小学校でどう活動して、その活

動が分断されないためのものととらえている。

- ・テーマについてはこれでよろしいか。
- ・異議なし。

(3) 令和8年度以降の幼保小実践事例集について

- ・(事務局) 今年度までの様式と大きな変更はなく、様式の下段には、「ときも学びのプロセス」で示す「幼児期の終わりまでに育ったほしい姿」を、園には、取組を通してどのような姿が見られたかに、小学校には、どのような姿と関連があるかについて、それぞれ○を付けて示していただく。これらは、幼保小連絡懇談会において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有できようすることを目的としている。
- ・ここまで提案について、意見・質問はあるか。
- ・2年間でテーマに取り組むので、令和9年度の形式は変えるといいのでは。
- ・1年目の振り返りの視点があるとよい。
- ・異校種の実践事例は参考にはなるか。他の園の実践も連絡協議会での話し合いのきっかけにはなると思うが。
- ・イデア集として活用してもらうという視点でいいのでは。もっと聞きたいということになれば直接聞いていただく。
- ・実践事例集の作成について、現場の先生方の負担はどうか。
- ・実践事例集を集めた形になっているが、これが正しい指導方法なのか、支援方法なのかわからない。全園、全学校ではなく、比較的レベルの高い事例を集めるとよいのでは。
- ・幼児教員の視点からいうと「正しさ」はなかなか編み出せない。園として、練りに練った研究は財産になり、それを広めていくのもよいのでは。
- ・保育園でそれをやるのは難しい。
- ・幼稚園・保育園は「できる・できない」ではなく、「親しむ」が基本である。また、幼稚園・保育園は方針が園ごとによって異なる。
- ・小学校の場合は幼保小の視点立ったものを出した方がいいのでは。
- ・事例集は園のカラーを知ってもらうきっかけにもなる。
- ・小学校はあまり園の事例について見ていない現状がある。しかし、目を通してみると子供たちのことを知るきっかけになるとわかった。
- ・実践事例集はアイデア集として活用する形でよいのでは。だが現場の負担を考えると項目を増やしすぎない方がよい。
- ・せっかく作っているのだから、振り返りを入れる方が作ったかいがある。
- ・小学校が実践事例を入れていることに大きな意義がある。本来は違う基準かもしれないとも考えるが、同じ書式でまとめて好事例ととらえている。
- ・書くことに意味がある。実践事例をまとめることで、自分たちがやるべきことを再度意識できるという面もある。
- ・実践事例集は協議の資料としてさらに活用を進めたい。
- ・幼保小連絡協議会の司会の方に、実践事例集をもとに話し合いを行うことを示していただきたい。また、参加する委員も適宜助言を行っていく。
- ・全部の部会で委員の姿勢を統一していくべきである。
- ・話が戻るが、来年は今年と同じテーマでもよいのではないか。「興味・関心」を先にもってきてもいいのでは。
- ・では令和8・9年度は「興味・関心」、10・11年度は「健康な生活」、12・13年度は「他者との関わり」でよいか。
- ・異議なし。

(4) 令和8年度以降の幼保小連携について

- ・(事務局) 昨年度、2案を提案させていただいた。協議の結果、令和7年度につきましては、この3年間の研究成果である「架け橋期カリキュラム等」を周知し、その活用方法について、「子どものよりよい成長を考える研修会」及び「幼保小連絡懇談会」の機会を生かして行う。そして、令和8年度には、より積極的な幼保小の具体的な交流機会の増加を目指した取組が実現可能か、令和7年度の幼児教育振興審議会にて検討していただくことになっている。小学校長会・私立幼稚園協会・私立保育園協会・市立園長会等、それぞれのお立場から、改めて、今後の幼保小の連携の在り方を協議していただきたい。
- ・実際、幼稚園にばかり行ってしまって、保育園にはいかないのではないかという懸念がある。保育園は1人ずつ、多くて3～4人しか1つの学校に行かない現状がある。「本校は、交流はしません」というお便りがくる学校もある。
- ・鶴ヶ島市は5月に学校公開を設定している。子供たちの姿をみて、フィードバックできるいい機会になっている。「今日は小学校の先生が来るよ」と、年長に意識付けするのも効果的だと考えられる。
- ・新一年生授業参観・情報交換会を設定していただくのは難しいか。
- ・公開日がかぶってしまうことも考えられる。まずは小学校の公開授業を知らせてもらい、そこに参加することから始めるのがよい。そして、1月～3月に年長の様子を見にきていただくことを手掛かりに連携を進めていく形がよいのではないか。
- ・不登校を防ぐためにも、5月～6月の連携がふさわしい。
- ・幼稚園・保育園を見に来てほしいという思いは強い。できれば就学前に見にきてもらうのがよい。
- ・保育園と学校の連携を考えると、第2案にプラスしたものが欲しい。また学校見学についても、教育委員会から働きかけてもらいたい。
- ・公開授業日を設定し、任意で参加する形でよいのではないか。
- ・(事務局) 顔を合わせる、そして子供の様子を直接見る、このような機会を設けていくことが柱である。
- ・まずはそういう機会を教育委員会に設定してもらいたい。
- ・目的をきちんと設定する必要がある。この会の意義としてはざっくりと幼児教育の実態を知ることにあると思うが、小学校は個別の子供のことについて知りたいというのがある。そこにずれが生じてしまう。
- ・教職員研修に幼稚園・保育園に行くという機会を設けるという手もある。
- ・他市の実践もあるが、難しい事情もある。
- ・個別の子供のことについては、この時期の情報交換でやっている。
- ・4～5月に園を見に行った。校長とクラス担任というペアで行った。とても意義があった。幼稚園・保育園で「ここまでできているんだ」という学びになった。1～3月に行くのがいいとも思うが、現状実現は難しい。また、案2についてもそれぞれの学校がどれだけ意義を感じているかが重要である。
- ・(事務局) 皆様から頂いた意見をもとに、あらためて案を提案したい。